

或る意味で上述の帰結の批判的反省となっているからばかりでなく、そこにおいてトマスにおける存在と人間的認識に関わる根本的な問題が露わにされるからである。

第一の論文は上述の帰結と逆の方向を取る。まず魂の外にレスが在り、それは確定したエッセを有する *res naturae* である。それに対応して魂の内なるラチオも魂の外なるレスに依存するものすなわち *res rationis* として承認される。さらに *res immaterialis* としての人間知性が *res naturae* に組み込まれるばかりでなく、魂の内なる *conceptio* もそれが *passio* である限り、魂の外にあるものの領域に属するとされる。最後にラチオも魂の内なるものではあっても、独自の確定されたエッセを有する限りレスと呼ばれうると考えられることになる。

このようにして、認識を存在の問題として把握するトマスにおいてレスとラチオが意味するものが何であるのか、という問題に読者は更めて直面することになる。

第二論文はトマスおよびアンセルムスの神の存在論証におけるそれぞれのレスの二義性を問題にしている。トマスの論証はレスの存在、実在の確認から出発する。このレスの特徴は、それが有限の存在者である、ということである。しかしレスの第一原因としての神と呼ばれるものは無限なるものであって、レスの世界に実在しないゆえにレスであるとは言われえない。一方の在り方を実在と言えれば他方は実在とは言われえないのである。アンセルムスにおいてもレスは二義的である。それゆえに、いずれにしても神の実在は論証されないことになる。このようにして超越の可能性とアナログアの問題をレスの意味と共に更めて問い直すことを迫ってこの大著は閉じられることになる。

川崎幸夫著『エックハルトとゾイゼ』

関西大学出版部，1986年，323頁

中山善樹

本書は著者が京大卒業以来、一貫して取り組んでこられたドイツ神秘主義に関する既刊の諸論文を集めたものであり、それぞれ年代順に、1.「エックハルトの根本問題」、2.「現代世界とエックハルト」、3.「生死の問題とマイスター・エックハルト」、4.「不

滅と不生」, 5. 「聖書解釈学と説教——エックハルトの『三部作への全般的序文』をめぐって——」, 6. 「ゾイゼ解釈の諸問題」, 7. 「ドイツ神秘主義の特色と今日における研究情況」という順番に配列されており, 西洋神秘主義一般に対する著者の研究姿勢を規定した論文, 「西洋精神の自己超越と神秘主義の本質由来」は, 執筆時期としては最初に書かれたものであるが, 付論として最後に収録されている。そのうち, ドイツ神秘主義の歴史的研究である第5, 第6論文を除いては, それぞれの論文の題名が示すように, いずれの論文も執筆したそれぞれの時期に懐いていた著者自身の問題との関連において, つまり「主体的関心事」から書かれている。

著者の「主体的関心事」の底流をなしているのは, 疑いなく禅仏教と西田哲学への関心である。著者は真摯な禅仏教徒としてエックハルトと対決し, エックハルトのドイツ語説教のうちに, 「絶対無」の思想を見出している。このような基本的姿勢において, 著者はエックハルト研究において, 西谷啓治氏によって拓かれた学統を受け継いでいる。全体として論文は, 主体的な強靱な思索によって貫かれており, 表現は可能な限りの彫琢を施されており, 単なる学術論文の域を越えて, 一個の言語芸術作品の品格を湛えている。

換言すれば, 著者はエックハルトを中世の特異な思想家として歴史的に研究するだけで事足りるとしない。勿論, 歴史的研究はどんな場合でも重要であり, 正確な歴史的知識は主体的研究の基礎をなすものであり, 著者も第5, 第6論文をそれに充てている。しかし著者はそのような正確な歴史的知識に基づいて, それ以上の事, つまりエックハルトのうちに, 思想的に困難な状況に陥っている現代においてもなお活きる思索を求めている。著者によれば, 現代世界とは, ハイデガーの言うように, 二千年来西洋の世界を基礎づけてきた「存在—神—論理」(Onto-Theo-Logik) 的構造が根底から覆され, プラトニーキリスト教的価値体系に代表される, 存在者全体に超越の態度をとる原理一般を否定しようとするニヒリズムの席卷する世界である。したがって, このような現代世界において, なお可能な哲学的思索とは, そのような伝統的な形而上学的思惟を脱した, ハイデガーの言う「思惟の或る別の次元」に属するような思惟である。現代世界とは, 正にこのような思惟が, 西洋精神の自己超越において拓かれるべき世界なのである。

著者はこのような思惟をエックハルトの思索のうちに見出す。著者の見解によれば,

エックハルトにおいては、ペルソナとしてある限りの三位一体なる神は、決してトマスのごとく「それ自身からある」(per se esse) 絶対者として定立されるべきものではなく、それはあくまでこのような神の根底に開かれた非ペルソナの超ペルソナの「神性」(gotheit) から出来たものとして見られている。著者によれば、エックハルトはこの神性、すなわち神の本質を「劫初の純一性」(die erste lüterkeit)、或いは「劫初の無」(daz erste niht) と呼び、このような出来事を著者は、「絶対無の端的な現成」(181頁) と呼んでいる。そしてこのような根源的な次元を西洋の思惟自身の内部から超出させたのが、偽ディオニシオス、エリュウゲナを経てエックハルトに至る否定神学の系譜に連なる思想家であると言われる。さらにこのような「神の根底」であると同時に、「魂の根底」でもある「脱底の場」である「劫初の無」において、父は父と等しい子を生み給うという「魂の根底における神の子の誕生」と言われる根源的な出来事が生じるが、これは著者によれば、所謂通常のカトリック神秘主義における「神秘的合一」(unio mystica) とは根本的に異なるエックハルトに独特な表現である。

以上から著者によって結論されることは、エックハルトは「存在一神論」の体系を絶対無の次元まで掘り下げることによって、神の内奥に絶対否定の深淵が開かれて人格神の立場の不可能性に直面したキリスト教を始原的な可能性に導き、無神論の地平からキリスト教の新生を実現した、——このようなエックハルトの宗教的無神論は西洋精神自体より生じるディレンマに耐え、更にそれを透見的に翻して行くことに通じている(87頁) とさえ言われる。

以上のような著者の大胆な所論に対して、私は著者と異なる立場からいくつかの基本的な疑問を提出することによって、批評に替えたい。著者はエックハルト研究の基本的姿勢として、従来わが国の代表的研究者と異なり、ドイツ語著作のみを偏愛してラテン語著作をスコラ学であるとして軽視する態度を採らず、それらの両者を視圏のうちに収めなくてはならないこと、しかも両者のうちに決定的乖離を想定するのは不合理であることを表明している。しかし私はさらに一步進めて、かつて碩学デニフレが主張したように、エックハルト研究においては、本来、学術的性格を持つラテン語著作が基準的位置を占めなくてはならないと確信している。

このような私の立場からすると、ドイツ語著作からのみ採られた上記の「神性の無」のモチーフから、エックハルトが「絶対無」の思想家であるとされているのは、納得す

ることができない。したがってこの意味でも、序文で予告されているエックハルトの『創世記註解』の「In principio 論」の刊行が一層の期待をもって待たれる。さらに「神性の無」のモチーフそのものについてどう考えるかということであるが、エックハルトが神性を神から区別したのは、アドルフ・ラッソンによれば、ポエティウスの注釈者であるギルベルトゥス・ポレターヌスの *divinitas, deitas* に遡源するものとされており、エックハルトに独創的なことではない。さらに神性が「無」とされていることについては、著者も述べているように、偽ディオニシオスを初めとする否定神学の伝統のうちで考察しなくてはならない。偽ディオニシオスにおいてすでにそうであるように、この場合の「無」(*nihil*)、ないし「超有」(*superessentialis*) は、いかなる欠如も意味しない。かえって、エックハルト自身がラテン語著作、例えば『パリ討論集』で言うように、このような場合の「否定」は、「肯定の横溢」(*auperabundantia affirmatio-nis*) を意味する。また確かに『パリ討論集』においても、神に *esse* や *ens* を適用するのは否定されているが、この場合に否定されている *esse* とは、拙論で示したように(『中世思想研究』第 24 号, 141—150 頁) 被造物の *esse*、すなわち *esse causatum* である。偽ディオニシオスにおいても、否定神学は肯定神学と切り離されてそれ自体として考えられているのではなく、それらは互いにあいまって神秘神学へと上昇していくのである。事実、エックハルトにおいても、多くの場合、それらの神性の無のモチーフと平行して、三位一体論的なベルソナ神論が語られているのであり、著者のように、エックハルトを「絶対無」の思想家であり、いわんやいかなる意味においても「無神論者」と断定することは、一面的であるとともに、困難であると思われる。

自己思索の開陳である主体的研究が重要であるのは言を待たない。しかしそれは、言うまでもなく、特定の思想家に関する研究である場合には、厳密で客観的な歴史的研究を基礎とするものでなければならない。エックハルトのラテン語著作については、言語的内容的なさまざまな困難から、その本格的な歴史的研究は、欧州においても、ようやく比較的最近になって、特にドイツとフランスの研究者の協力の下に盛んになってきた。そのような研究状況にあって、ラテン語著作の歴史的研究である第 5 論文「聖書解釈学と説教——エックハルトの『三部作への全般的序文』をめぐる——」のもつ意義は誠に大きい。ここでは、「短縮」を旨とするエックハルトのラテン語著作に共通する困難が、学問的に説得力のある「推測」によって適度に敷衍されて、「命題論集」、「問

題論集」,「注解論集」からなる『三部作』の複雑な構造が見事に分析されている。トマスとの関係についても、エックハルトがトミズムから出発していることは疑いえないとしても、トマスとは対立する結論を引き出そうとしているところに「新プラトン主義への志向」を見出しており、ここにエックハルトの固有性を認めている。エックハルトとの関連におけるトミズムについては、第6論文「ゾイゼ解釈の諸問題」に詳述されており、エックハルトとトマスとの関係を考察する上で参考となる。

以上述べたことから明らかなように、私は、第5、第6論文に見られるようなエックハルトのラテン語著作を中心とするドイツ神秘主義の客観的な歴史的研究に、著者の今後の活躍を期待したい。それらの研究は、研究者間の立場の相違を越えて裨益する所が大であると信ずるからである。